

保育の感情労働研究会通信 第3号

2012・12・20
NPO法人さやま保育サポートの会
保育サポート研究所 04-2957-0451

保育の感情労働に関する研究的・実践的関心の広がりは・・・？

諏訪きめ

☆第14回研究会は、7月8日、京都・東山にある京都女子大学で行われました。そこに集う前に、小学校時代の修学旅行を懐かしみながら蓮華王院三十三間堂を訪ね、平清盛が後白河上皇に寄進したという居並ぶ国宝の仏像に見入り、見とれ、動けなくなりました。その後ハイアットホテルのレストランでランチを楽しみ、上月さんが用意してくださった京都女子大学の研究会会場へ赴きました。「こういう優雅な時を過ごすことも大切ね！」と“研究会+α”の楽しみ方を確認し合ったひとときでもありました。

★研究会では戸田有一さん（大阪教育大学）が「見え方の操作と保育—研究の意義と方向性—」と題した企画趣旨を説明し、続いて木戸彩恵さん（立命館大学）が、「自己—他者の関係性の媒介としての化粧」について、90分にわたるきめ細かな話題提供をしていただきました。京都大学やまだようこ門下生であった木戸彩恵さんは、博士号を取得したばかりの新進気鋭の若手研究者です。今回第15回研究会初日は、そこでの議論を受け継ぎ発展させるものとして、戸田さんから再度問題提起をしていただきます。

☆“問題提起の書”として組み上げ出版した『保育における感情労働』は、まもなく満2歳を迎えます。ところで保育の感情労働に関する研究的・実践的関心は広がっているのでしょうか？執筆にかかわった皆さまはいかがお考えでしょうか？先鞭をつけたものの一人として、気になっているところです。

全国私立保育園連盟主催の保育実践セミナーは、「保育の専門性を新たな視点で考える」をテーマに、10月30日から11月2日にかけて岡山で開催されました。初日に「保育における感情労働—保育者の専門性を考える視点として—」と題して、諏訪と神谷の両名が、機会を得て“講演と対談”を行いました。

★保育セミナーの参加者は170余名と多く、その地域は北海道から沖縄まで広範囲でした。その職域も園長・副園長23%、主任・副主任10%、保育士62%、調理員1%、看護師1%・・・と実に多様で、こうした大きなセミナーで半日を尽くして保育の感情労働を語る機会は滅多にないことです。そこで何を語るのか、二人は事前に打ち合わせて、諏訪が「保育における感情労働」全般をお話し、神谷が調査データを用いてやや学術的に深める形で臨みました。しかし講演後の質問事項は「感情規則って？」「バーンアウトって？」「ストラテジーって」というような用語に対して理解を求めるものが多く、「感情労働」を「保育者の専門性を考える新たな視点」として理解してもらうには程遠い感じもしました。翌日、午前・午後を通して「実践を通して感情労働を考えてみよう」と題するグループワークを諏訪が担当して行ないました。午前のテーマは「遊び」、午後のテーマは「保護者支援」としました。

☆遊びのワークでは、グループ毎にそれぞれが最近かかわった心に残る砂場遊びを出し合い、その中から一つを選んで事例化し、その後ロールプレイに仕立て演じてみるというものでした。子どもとの遊びの場面を演じてみることを通して、子どもの内面のイメージを引出し、それに寄り添い、子どもの遊びにつきあい続けることの楽しさとしんどさが浮き彫りにされ、保育の中での保育者の感情労働にやっと視点を当てることができた

ように思いました。保育者の心の葛藤と向き合い、その感情をどうコントロールするか、その中に保育者の専門性が見事に表されるのではないかと・・・という辺りまでは共有できたのではないかと、と思います。

一方保護者支援についてのグループワークは難しく、各グループが一つずつもつとも困難と思われた保護者支援事例の分析を手掛けることにしましたが、事例があまりにも多岐・多様で、共通項を引き出しにくく、すっきりした結論にまでは至りませんでした。

☆確かに「感情労働」というキイ概念を理解すること、さらにそれを取り巻く感情演技・表層演技・深層演技・感情の擬態、肯定的感情・否定的感情、感情規則・・・等々周辺概念を明確にとらえ、保育実践と対応させていくことは、なかなか難しいことです。今、研究会に求められることは、まず第1には「感情労働」という営みを根気よく実践事例とも対応させながら、当事者である保育者にしっかりつかんでもらうこと、第2には、保育者が自身がその専門性を高める手立てとして「感情労働」という概念が使えると思えるようにしていくことではないでしょうか。日本保育学会や日本発達心理学会での自主シンポやラウンドを根気よく続けていく一方で、「感情労働」をもって保育者の輪の中に入っていく努力が求められるのではないかと思います。今回の研究会で、こうした点についても議論出来たら・・・と願っています。

第3号通信では、保育実践セミナーを企画された全国私立保育園連盟研修部の佐々木美緒子さん、安達和世さん、研究会のメンバーでセミナーの参加者であった鳥取・みどり保育園の井勝豊美さん、大勢の保育関係者に向かって講演した神谷哲司さんに、セミナーへの感想を語ってもらいました。研究会のメンバーでもある佐々木美緒さんは、全国私立保育園連盟の研修部員である立場を活かして、「感情労働」の視点を保育者に届ける機会を積極的につくってくれています。

セミナーの企画者として

青戸福祉保育園 佐々木美緒子

制度が変わり、保育園や幼稚園の仕組みが変わっていく時期だからこそ、教育とか養護とかいう言葉にとらわれずに、もっと保育の質を本質的に捉えていけないか。また、多機能・多面化が求められてきている保育の営みのしんどさも、「感情労働」という視点で捉えなおしたときに、客観化され、仕事として乗り越えていく道もつけやすくなっていくのではないかと、とも思い今回のセミナーの柱を「感情労働」にすえて企画を行いました。

しかしやはり現場の保育士たちにはとても難しい理論でした。理解できない言葉が多かったこと、自分達の実践と結びつけながら考えることが難しかったことなどが感想の中に多く見られました。そのような中でも「遊び」をテーマにワークを行ったときには、子どものそのときの思いをくみ取りながら相手に合わせての感情表現や言葉かけを行うことで遊びが発展し、楽しさの共感を生むことなどを、素直に感じあうことが出来ました。生活が得意と思う人が多かった参加者達でしたが、遊びを豊かにしていく自分達の役割の重要さやその楽しさを実感した人が多かったようです。保育の質につなげていくことが出来る手ごたえを感じました。

一方「保護者支援」のテーマについては、実践を報告しあうことで精一杯。職場の中の組織的な取り組みにまで討論を進められず、感情労働から見た「保護者支援」には繋がって行きませんでした。「感情労働」を切り口として保育を見直していく初めての試みでしたが、たくさんの人に理解しやすい道を作っていくには、たっぷりとした時間と伝え方の工夫が求められているというのが、率直な感想です。



保育者の関心・手応えは高かったけれど・・・

全国私立保育園連盟研修部長 安達和世

保育実践セミナーの際には大変お世話になりました。また、日頃より全私保連の研修活動をご支援いただき感謝申し上げます。

感情労働というあらたな視座は、わたくしたち保育に携わる者にとっては、まだまだ、入り口から中を覗いて様子をうかがったという範疇でしょうか。保育者の関心は、期待も込めて手応えは非常に高いという印象でした。理論の構築途上であるということ、また聞く側に安心して学ぶということに慣れてしまっている体質があることで、今回の参加者にとっては、ハードルの高い内容だった様子でした。

保育者自身が自分と仕事の機能面と本質面とを整理し、課題の設定を個別と全体に分けて据える手立てを得られる可能性を感じたのではないのでしょうか。わたくし自身の理解が不十分で上手く伝えられず申し訳ありません。諸事に追われじつくりと向き合っていない中で軽々しく感想を述べるのは憚られますが取り急ぎということでご容赦お願いいたします。

寒さが厳しい季節に向かいますのでご自愛くださいませ。ますますのご活躍を祈念いたしております。失礼いたします。(2012・11・11)



保育の専門性・自分自身の振り返りの場に

みどり保育園 井勝豊美

現場の保育者は、保育園に勤務する仕事役割として、子どもの成長・発達を担いその保障を考えながら、日々奮闘しながら生活しているのが現状です。保育者の願いは、子どもが豊かに成長していく過程を子どもとともに喜び合う事です。その為に心がける事として、保育園内で力を入れていることが保育の環境であり、人的環境です。

保育者同士のコミュニケーションをしっかりととりながら、個々の子どもに丁寧に関わる保育の取り組みを心掛けています。子どもへの言葉かけや表情・声のトーンなど、保育者は確かに表層演技しているのですが、それにもかかわらず、やはり保育者はそれをあたり前のかかわりとして捉えています。分析をする側と現場の捉え方の相違ですね。

今回の保育実践セミナーで感じた事は、園長としての責務の重要性です。保育者が安定して仕事ができる環境づくり、保育者支援、又職員指導として次の指導者を育てながら、園運営の充実を図っていく・・・等々、園長としての責任を痛感しました。保育システムはもちろん、園運営システムを明確化し、個々の保育者の役割を確認しあいながら、それぞれの“自分の立ち位置”をしっかりとしていきたいと思いました。園長として一番の保育者についての悩みは、保育に携わる為の研究意欲の欠乏と自分自身の保育の営みの振り返り・評価の欠如です。これらが保育者自身に備わると、失敗も前向きに捉えられ、保育を変えていくことができてくると思います。保育者が変わることで、保育も変わり、保育の質も向上する事を改めて実感したセミナーでした。



*** 「感情労働」という言葉を使わないで、保育者が感情を動かしながら子どもや保護者に

かかわっているところを描き出すことや説明することはできないだろうか？***

研修会の講師だけでなく、大学の講義も含めて人前で話をするのは苦手なのですが、昨年度のこども未来財団の研究の結果の周知ということもあり、諏訪先生のご指名を受けて登壇者の一人として保育実践セミナーに参加させていただきました。とはいえ、すべて御膳立てを諏訪先生にやっていただいて、私はとりあえず量的データにおける報告部分を担うというように役割を明確にさせていただけたおかげで、私の発表自体は何とかやりこなせることができたかと思います。

2008年の京都のシンポジウムからずっと、この「感情労働」というテーマを自分なりにどのように咀嚼し、位置づけていけばよいのか手探りを続けてきております。その中で、この「感情労働」という言葉が、その言葉の内包する意味とは違ったところで先走って保育者のみなさんに解釈されてしまうところを見ながら、はたして保育を「感情労働」としてとらえることの目的を果たすために、その「感情労働」という言葉で表現するは不可欠なのか否か、などいろいろと考えてきました。そのあたりを含め、本来であれば2011年の発達心理学会のシンポでお話する心づもりだった、保育者の「役割」と「感情」にまつわるところを、今回のセミナーではお話をさせていただきました。つまりは、あえて、「感情労働」という言葉を使わないで、保育者が感情を動かしながら子どもや保護者にかかわっているところを描き出すことや説明することはできないだろうかということを考えるようになっているのです。例えば、こども未来財団の量的調査において、「情動的知能」という概念を導入したのもそうした想いをベースとしていたのです。

しかしながら、今回、諏訪先生と改めてこの「感情労働」をめぐってお話を伺ったり、やりとりをする中で、保育者の業務上の感情の動きを「説明する」ことについては、一体誰に対して説明するのか、という視点が欠けていたことに気づかされました。私は暗黙のうちに、この概念が「専門性」の議論にまつわるところから、保育者自身のリフレクションを促すための「説明」に限定して考えていたのです。しかしながら、保育職という仕事は、その業務そのものがいまだに社会的に十分理解されているとは言えず、今後より保育という仕事を「外部」、すなわち社会一般に広く周知していくためには、「感情労働」という用語を積極的に用いていくことが必要であるというのが諏訪先生のスタンスとのことでした。

このことで、付け焼き刃ではありますが、保育者の労働問題にも論稿を寄せた身として反省させられるとともに、これまで諏訪先生が長年保育現場に寄り添って努力を重ねてこられた重みや迫力といったものを感じさせられる一幕となりました。いやはや、「感情労働」とは、実に奥深いものだと、改めて身を引き締める次第なのです。



編集後記 実際に神谷さんと連続講演をしてみて、はじめてある“ズレ”のようなものに気づきました。こども未来財団の助成を受けて「保護者支援における保育者の感情労働ストラテジー」報告書がまとめ上げられたとき、そこには「情動的知能」を測る尺度がすでに用意されており、また「自己の感情への内省」「他者への気配り」(p. 37)という形で解説もされていました。しかし、それが「感情労働」という用語を用いないための仕掛け？のつもりだったとは全く気付いていませんでした。研究会で「感情労働」の議論を深めていく必要がありますね！！(S・K)

